

ロビンソンの“ワイルド・ガーデン”とはどのような庭か?¹

新妻 昭夫(人間環境学科)

ウィリアム・ロビンソン(William Robinson: 1838-1935)は英国のガーデナーであり、週刊園芸新聞『ザ・ガーデン (The Garden)』(1871-1927)を創刊した園芸ジャーナリストとしても知られる。彼がその主著の一冊『ザ・ワイルド・ガーデン (The Wild Garden)』(1870年)で提唱し、彼の名が広く知られるきっかけとなった「ワイルド・ガーデン」とは、いったいどういった庭なのか?

この庭園様式はどういったものなのか、必ずしも明確になってはいないように思われる。たとえば、英国の「在来(自生、土着)種」²を使った「自然風な庭」といわれることがあり³、今日の環境に配慮した生態学的な庭造り、エコロジカルな庭造りの先駆けとロビンソンを位置づける意見もある⁴。しかし、原題をサブタイトルまで含めて見てみると、初版では次のようになっている。

-
- 1 本稿は、別稿「外来種と在来種の曖昧な境界線」(『園芸文化』月号:90~112ページ)とあわせて、園芸文化研究所の2008年度助成研究「ロビンソン“ワイルド・ガーデン”の研究——“半栽培”の視点から」(一般研究)の報告書を構成しているため、両稿をあわせ読まれることを希望する。
 - 2 英語の「native species」であり、「在来(自生、土着)種」という煩雑な書き方をしたのは、定訳がまだ定まっていないからである。別稿(注1)も参照されたい。
 - 3 たとえば、岡崎文彬『ヨーロッパの造園』(1969年、鹿島出版会)は、(ジーキルについて述べた部分だが)「ロビンソンとともに、海外発展の一環としてしきりに庭園に持ち込まれる外来植物の栽培を排斥し、郷土植物を使用すべき旨を力説した」(247ページ)としている。「郷土植物」は「英国原産の野草」のことと見なしていいだろう。また宮前保子『“イングシッシュガーデン”の源流——ミス・ジーキルの花の庭』(2001年、学芸出版社)は、「ロビンソンは、春花壇は装飾的なチューリップやパンジーで飾るのではなく、イギリスに生育する野生の春の花を導入すべきであると唱えた」という。ジーキル『ジーキルの美しい庭』(土屋昌子訳、2008年、平凡社)の訳注「*2」(32ページ)も参照。
 - 4 この点が別稿(注1参照)での議論の主要な焦点となる。この問題がロビンソンの「ワイルド・ガーデン」をテーマに選ぶ強い動機となった。

Robinson, W., 1870. *The Wild Garden: or, Our Groves & Shrubberies Made Beautiful by the Naturalization of Hardy Exotic Plants. With a Chapter on the Garden of British Wild Flowers.* John Murray.

英国の在来種の野草 (British wild flower) を使った庭に関する章は最後の部分 (第Ⅳ部:後述) であり、いわば付録とっていい。本題の「ワイルド・ガーデン」は、「耐寒性のある異国産の植物 (hardy exotic plants)」を「帰化 (naturalization)」⁵ させて「林 (grove)」や「灌木の茂み (shrubbery)」を美しくすることと読み取ることができる。

『ワイルド・ガーデン』は何度も改定されたが、改訂第2版(1881年)では、「野草の庭」を扱った第Ⅳ部が削除されてサブタイトルの該当部分がなくなり、その部分がやや長たらしいものに差し替えられた——「花の庭造りの暗黒時代から抜け出すひとつの方法として、およびロンドンの公園の裸のボーダーを再生するための提案」⁶。

第5版 (1895年)⁷では、「野草の庭」の章が復活し、タイトルは次のようにすっきりしたものとなった。

The Wild Garden or the Naturalization and Natural Grouping of Hardy Exotic Plants with a Chapter on the Garden of British Wild Flowers.

ようするに、主旨は初版のとき以来、「異国産の耐寒性植物」を「帰化」させる造園なのである。「natural grouping」は、これだけでは意味がつかみづらいが、自然風に配置して植栽することと理解できる。初版からすでに25年が経

5 今日の外來種問題の議論では、「帰化」という言葉は社会的に別の意味が確立しているので使用を避け、「定着 (establishment)」が使われる。外來種問題については、日本生態学会編(2002年)『外來種ハンドブック』(地人書館)を主要な参考文献とする。

6 “being one way onwards from the dark ages of flower gardening, with suggestions for the regeneration of the bare borders of London parks”. Bisgrove (2002)のpp.79-80による (後述の注16参照)。

7 Sagapress/Timber Press刊(1994年)のファクシミリ版。

過し、賛否両論の議論のなかで「ワイルド・ガーデン」というアイデアがより明確になったということなのだろう。ロビンソンの主著であり、「ガーデナーのバイブル」⁸とさえいわれる『英国の花の庭 (The English Flower Garden)』(1883年)もすでに刊行されていた。

なお、本稿では「naturalization」を『生物学辞典』(岩波書店)などにもとづいて「帰化」とするが、本稿での議論の文脈に置いて考えるなら、原義に帰って「自然化」と訳すべきかもしれない。そう考えるなら、「ワイルド・ガーデン」を「自然風の庭」と解釈するのも理にかなっている。「natural grouping」という言葉も重視すれば、「自然風の」という意味合いがさらに強まってくるだろう。

本稿の目的は、ロビンソンの「ワイルド・ガーデン」理論がどのようなものかを、彼自身の書き残したものを再検討して明確にすることにある。また、数年前に制定された「外来生物法」⁹と「ワイルド・ガーデン」との関係別稿(注1参照)で検討するので、あわせて読んでもらえればありがたい。

「ワイルド・ガーデン」をロビンソン自身はどう定義していたか？

まず手元にあった『ワイルド・ガーデン』のペーパーバック版を調べてみた。第5版(1895年)のファクシミリ版¹⁰である。巻頭の「序言(Preface)」に、「ワイルド・ガーデン」を提唱した理由などが書かれている(日付は「1881年5月28日」なので、第2版の「序言」の再録と考えられる¹¹)。

……当時、植物の美の広大な世界の少なからざる部分が流行の「方式」によって我々の庭から閉め出されていることに気づいていたので、私はその美しさを庭に持ち込むいくつかの方法を熟考するようになった。そのひとつが、「ワイルド・ガーデン」という呼称と見通しであった。私

8 Charles Quest-Ritson, 2001. *The English Garden: A Social History*. p. 217.

9 正式には「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」。

10 Sagapress/Timber Press刊、1994年

11 Bisgrove (2008) (注16参照) は、「第2版」でアルフレッド・パーソンズ (Alfred Parsons: 1847-1920) による多数の挿絵が採用されたことの説明 (p.79) のなかで、「第2版」の発行年を1881年としつつ、曖昧なところがあり断定できないと但し書きを付している。

は他国産 (from other countries) の膨大な数の美しい耐寒性植物を、植林地や野原や森の数多くの場所で、あまり苦勞することなく帰化させられるかもしれないと考えるにいたった……(xiivページ)

この引用の後半部を「ワイルド・ガーデン」の定義と見なしていいだろう。他国産の植物すなわち外来種を、(庭そのものではなく) 林や野原に帰化させることとされている。

引用の前半部からは、「ワイルド・ガーデン」を提唱した背景に、当時の「流行の“方式”」に対する批判があったことがわかる。批判されているのは、当時の主流であった非耐寒性の草花を温室で育ててから花壇に植え込む「カーペット花壇(carpet bedding)」様式と見なしていいだろう¹²。

同書には「1894年新版の前書き」(1894年4月18日)¹³も収録されていて、そこには次の言葉が見える……

ワイルド・ガーデンというアイデアは、我が国の耐寒性の野草と同じ程度に耐寒性のある異国産の植物を、植えた後は世話や費用をかけなくてよいような場所に植えることである。(xixページ)

「ワイルド・ガーデン」が「外来種を帰化」させるという手法であることが確認されるが、同時に、「世話や費用をかけなくてよい」という言葉にも注目すべきだろう。「カーペット花壇」批判と合わせて考えれば、なによりも手間と費用(温室で苗を育てて移植し、また短命な非耐寒性植物を季節毎に植え替える)の軽減が、きわめて重要な目的だったことがわかる。

同書にはまた、巻末の付録Ⅱとして「第8版(1932年)のためのロビンソンのメモ」が収録されている(313ページ)。そこには「ワイルド・ガーデンの起源」というべき逸話が紹介されている。

12 『ジーキルの美しい庭』(注3を参照)の第9章の冒頭部とそこに付された訳注(108ページ)を参照されたい。

13 この「新版」は、Allan, Mea (1982) (後述の注14)のp.173によれば、1894年に出た「第4版」である。

ワイルド・ガーデンというアイデア……を最初に思いついたのは、サザン鉄道 (the Southern Railway) のイースト・グリンステッド (East Grinstead) とウェスト・ホースリー (West Hoathly) 間の土手沿いだっと思う。駅を抜けるとき、私はときどき灌木や草花の種子をポケットに入れておいて、よくそのあたりにばら撒いていた。そのあとたいていはそのことを忘れてしまうのだが、どれもがほとんど間違いなく芽生えて姿をあらわした。それらは土手をしばらくのあいだ飾り立てていたが、当局の権力が土手の灌木と草はすべからく刈るべしと命じ、私の植物たちは消滅したが、しかし根はそのまま残ると私は考えていた……

鉄道沿線など身近な環境を美しくしたいという思いが伝わってくる話であり、日本の昔話の「花咲か爺さん」を思い出させる微笑ましい逸話だと思う。しかし、今日の英国の鉄道沿線で中国原産のブッドレア (フサフジウツギ: *Buddleja davidii*) をはじめ帰化植物が雑草化していることを想うとき、頬がこわばるような感触も否定することができない。

『ワイルド・ガーデン』の主張と当時の流行への批判

ロビンソンが当時の英国の園芸界で注目されるきっかけとなったのは、1870年に刊行された『ワイルド・ガーデン』であった。ロビンソンの伝記としては、ミア・アレン『ウィリアム・ロビンソン』¹⁴が長らく定評を得ていたが、英国レディング大学のビスグローブ¹⁵が新しいロビンソン伝¹⁶を出版した。まずは彼の経歴をざっと一瞥しておこう。

ロビンソン (William Robinson: 1838-1935) はアイルランド生まれ。風景式庭園の徒弟としてガーデナーの修行を積み、いくつか職場を変えた後、1861年にイングランドに移って、ロンドンのリージェント・パークの一面を占め

14 Allan, Mea, 1982. *William Robinson 1838-1935: Father of the English Flower Garden*. Faber and Faber Ltd.

15 Richard Bisgrove (1944-). 英国の造園家で庭園史研究者であり、『ジーキルの美しい庭』(注3参照)の底本の編者でもある。2004年度RHSヴィーチ記念メダル受賞。

16 Bisgrove, R., 2008. *William Robinson: the Wild Gardener*. Frances Lincoln.

ていた王立植物学協会(The Royal Botanic Society)¹⁷の植物園に職をえた。この植物園で草本園を担当し、このときに英国産の野草類(wild flowers)を研究したとされる。1866年に植物園を辞し、「ガーデナーズ・クロニクル」紙と「ザ・タイムズ」紙の通信員として、ヨーロッパを旅行する。とくにパリの庭園とアルプスの高山植物を熱心に調査し、1868年に『*Gleanings from French Gardens*』、翌年に『*The Parks, Promenades, and Gardens of Paris*』を刊行し、そして1870年には『*Alpine Flowers for Gardens*』と『*Wild Garden*』を矢継ぎ早に刊行し、とくに後者の成功で評判を得ることとなった。その勢いをえて、翌1871年には週刊園芸紙『*The Garden*』を創刊し……これ以降のことは、とりあえずは必要ないだろう。一点だけ付け加えておけば、『*Wild Garden*』を刊行する前後にアメリカを旅行している。主要な目的は、彼が少年のころに家族を捨てて渡米していた父親に会うことだったようだが、北米大陸の植物相をつぶさに観察したことが『*Wild Garden*』の着想に影響をおよぼした可能性はあるだろう。

『*Wild Garden*』初版は4部から構成されている(全体で236ページ)。第Ⅰ部は「説明(Explanatory)」で、39ページ(39÷236=17%)。第Ⅱ部は「林、半野生的な土地、灌木林で帰化させるのに適した耐寒性の外来植物の目録」で、英名と学名のほか「原産地、一般的な特徴、草丈、花の色、開花期、増殖方法、植栽に最適な場所」が一覧表に整理されている(82ページ、35%)。第Ⅲ部は「推奨種選(Selection)」で、特性や適した場所別に推奨種を学名で列記(32ページ、14%)。第Ⅳ部は「英国産の野草の庭」(82ページ、35%)。

ここでは第Ⅰ部の、提唱者本人による「説明」に耳を傾けるだけでいいだろう。この「説明」は、第五版でもほぼそのまま使われている(数箇所が省略され、また若干の修正が加えられている)。

「*Wild Garden*」とはなにか、その書き出しは……

この小さな本の狙いを理解してもらうためには、我が国の花の庭の過去と現在の状態をざっと一瞥してもらうといい。およそ20年前から遡っ

17 この協会とその植物園については、『園芸文化』第4号(2007年)掲載の拙稿「英国19世紀の園芸雑誌の研究——ガーデニング文化の大衆化の視点から」の注27を参照されたい。

てシェイクスピアの時代まで、イングランドの庭の花はほぼすべてが耐寒性であった。それらは北方ないし温帯の地域産のものであり……身を切るような春の大気のなかで早くも花開き、心地よい夏の日はもちろん、遅くは湿った秋の突風のなかでも花を咲かせ……

ロビンソンが懐かしむ昔の庭にどのような花が咲いていたかは、「シェイクスピア、ミルトン、ベーコンといった英国の偉大な詩人や文筆家」の文章で知ることができ、どれほどすばらしい眺めだったかも想像できるだろうという。これらの花々の魅力は、「いまもケントやサセックスなどイングランドの多くの地域の小さなコテージ・ガーデンで見られるかもしれない」¹⁸が、しかし「深紅色のゼラニウムが数多くの可愛らしい小さな庭の汚れない花々を侵食しはじめている」。

ようするにイングランドの古きよき時代の花の庭を取り戻そうということだが、まず考えてみるべきは、では当時はどういった時代だったのかということだろう。「およそ20年前」になにが起こったのか、また「侵食しはじめ」た「深紅色のゼラニウム」とはなんのことなのか？

ロビンソンは次のように言葉をつづける——「およそ1世代前に、ある趣味が出現しはじめた」。それは多数の非耐寒性の植物を夏の屋外に配置するやり方で、その「目的は、はっきりした色の人目を引くマス〔量塊感:mass〕を生み出すこと」にあった。つまりヴィクトリア朝の英国の主流であった色彩の派手な「カーペット花壇」などの流行から足を洗い、古きよき時代の庭に戻ろうという主張である。

「この方式〔システム〕がもたらす色合いの華麗さがきわめて魅力的であったため」、この「花壇方式(the bedding system)の導入」以来、古くから愛好されてきた花々はすべて、次第に追い払われるようになった。「国中の大きな庭園

18 当時の古民家保存運動とロビンソンとの関係は、今後の課題としたい。ジーキルがはじめてロビンソンの『ザ・ガーデン』事務所を訪れたのは1875年のことだが、それから間もなくの1877年には「古民家保存協会」がウィリアム・モリスによって設立された。また「コテージ・ガーデン」と呼ばれる庭と、そこに植えられていた「コテージ・プラント」と呼ばれる植物についても、今後の課題としたい(この問題についての基本文献としては、次のものがある:Scott-James, A., 1981. *Cottage Garden*. Penguin Books.)。

では、耐寒性の花が一本も見当たらないということが稀ではなくなり」、その結果……

……すべてのエネルギーと費用が、夏の装飾のために必要な数千株もの外来種の生産に費やされている。しっかりと胸に刻んでおくべきは、この方式にかかる費用は毎年のことだということであり、このやり方にどれほどの金額を費やそうが、またそれを完成させるために何年が費やされたにせよ、11月の最初の冷たい霜が降りれば、また次の一年のための費用と労力が必要となるだけということだ。

この「費用と労力」の無駄に対する強い批判を、前節で見たように、ロビンソンは後年になっても強調している。彼が職業ガーデナーであったことを考えると、みずからの業界に不利となる主張のようにも思える。それはさておき、このような現状を解決するために彼が提唱したのが「ワイルド・ガーデン」ということになる。

当時の流行に対する批判という点で、中表紙裏に引用されているシドニー・スミス¹⁹の言葉が参考になる。初版だけでなく第五版でもそのまま使われているので、ロビンソンは自分の主張の裏づけとしてきわめて効果が高いと考えていたと思われる。

数年前のことになるが、私は生まれてはじめて、田園地方にある非常に壮大で美しい場所に滞在した。そこの庭園は完璧な審美眼でレイアウトされているといわれていた。はじめの3日か4日のあいだ、私は完全に魅せられてしまった。なんとというか自然よりはるかにすばらしく思われ、私は大地が改良の最新の原理にしたがってレイアウトされたらと、ほんとうに思いはじめていた。……3日ほどもたつうち、私は疲労感で死にそうになってしまった。一本のアザミやイラクサ、積み重なった枯れ枝——なんであれ偶然にできた、意図の感じられない装いをま

19 シドニー・スミス(Sydney Smith: 1771-1845)は英国の聖職者で、随筆家として名高い。ここでの引用の出典は確認できていない。

とったもの——が、ほっと息をつかせてくれた。私は造成された庭園をよく逃げだし、隣接するガチョウ放牧用の共有地 (goose-common) を歩きまわった。そこには馬車の轍、砂利を掘った穴、でこぼこの地面、不規則、粗野で紳士的なところのない雑草、そのほか無視が生み出すあらゆるものがあり、制限された範囲に詰め込まれたデザインの成果、単調な美の、千倍も心を満たしてくれた。(シドニー・スミス)

「自然は不規則を好む」という英国風景式庭園の格言を思い起こさせるとともに、当時の知識人の代表の一人であるシドニー・スミスが、芸術的に完成された人工美と不規則な自然美とのあいだで揺れていることが興味深い。

なにをどこに植え込むべきか

「ワイルド・ガーデン」の目的はなにか、ロビンソンの言葉をもう少し見ていこう。

なにがなされるべきか？……私の目的は、どのようにすれば、ミックスト・ベッディング (the mixed bedding) など他のどの方式のすぐれた特徴も失うことなく、いま実践されているどれよりもはるかにすぐれ、しかしどちらも補うことになるような、そして耐寒性の花々のさまざまな美しさを、古き庭園様式のもっとも熱烈な称賛者がこれまで夢見たよりも、さらに多く見てもらえるようなものを追求できるかを明らかにすることにある。地上の数多くの地域の数え切れないほどの美しい在来種〔英国から見れば外来種〕を、我が国の林や、野生や半野生の場所、プレジャー・グランドの荒れた部分など、そしてほとんどあらゆる種類の庭園の利用されていない場所に帰化 (naturalizing) させること、すなわち野生化 (making wild) させることによって、それをなすことができるだろう。

当時の流行を、かならずしも全面否定していないことは注目しておくべきだろう。邸宅の周囲の庭ではその「すぐれた機能」を生かし、すこし離れたと

ころの「林や、野生や半野生の場所、プレジャー・グラウンドの荒れた部分」、また「庭園の利用されていない場所」に、「地上の数多くの地域」の美しい「在来種(native)」(英国から見れば外来種)を「帰化」させ「野生化」させる。

美しい外来種を帰化させるべき場所は、庭そのものではなく、周辺の林など「野生や半野生の場所」である。したがって都市やその周辺ではなく、郊外かさらに遠くの田園地帯(カントリーサイド)が想定されている。そのような土地の邸宅(カントリー・ハウス)のまわりに広がる「景観」を、外来種を帰化させて美しくすること、それが「ワイルド・ガーデン」の目的なのである。読者対象とされているのは、もとの地主階級や新興ブルジョア、あるいは都会から逃れてきた「上層中産階級(upper-middle)」であろう。

ここで眼を転じて、『ワイルド・ガーデン』初版の唯一の挿絵に注目してみよう。林縁の明るい場所に外来種が植えこまれていること、またキャプションに引用されているフランシス・ベーコンの言葉²⁰も気になるが、それ以上に、描きこまれた人物が気になるからである——御婦人と少女の親子連れが、散歩かピクニックを楽しんでいるように見える。

根拠をしめさない乱暴な議論になることを承知でいえば、ロビンソンが批判する当時の流行の形式の花壇などは、いわば女性と子どもたちの場所であった。邸宅に近接した場所にあり、しかも囲われた敷地内であり、外部の危険から守られ安全が確保されている。そこを利用する女性と子どもたちのために、美しい花が植え込まれていた。女性と子どもたちが安全に過ごせる場所を提供することは、所有者である男性の社会的地位の証明であり、同じ階級の人々を招待して社交の場所とすることで、自らの社会的地位を誇示することもできた。

一方、ロビンソンがガーデナーとしての訓練を受けた風景式庭園は、男性のための庭である。狩猟などのスポーツを通じて同じ階級の男同士の社交の場となり、また領地を美しい農村景観として庭化することで社会的地位を誇示しあった。その風景式庭園とは別に、邸宅のそばには広い芝生の「プレジャー・ガーデン」があった。社交の場であるとともに、日常は女性と子ども

20 フランシス・ベーコン『随筆集』第3版(1625年)の第46章「庭園について」の一節(成田成寿訳が『世界の名著』第20巻、中央公論社刊に収められている)。



ロビンソン『ワイルド・ガーデン』初版の扉絵(唯一の挿絵)。絵の下に次の言葉が添えられている——「私はそれが、できるだけ、自然の野趣(naturll wildnesse)になるよう作られるようにしたい」(F・ベーコン)

たちの場所だっただろう。また野菜や果物を自家栽培する壁で囲われた菜園の一画では、室内を装飾するための花も栽培され、後の時代に児童文学の傑作として名高いバーネット『秘密の花園』²¹(1911年)に描かれたように、男性たちから隔離された女性と子どもたちの世界となっていただろう(そこに立ち入るのを許されているのは、主人公の少女メアリのほかは、少年ディコンと老庭師ベンの二人だけ。社会的にも生物学的にも、男性の範疇からは排除された存在とっていいだろう)。

そのように考えたとき、『ワイルド・ガーデン』初版の扉絵は特別なメッセージを発しているように思われる。女性と子どものくつろぎの場が、邸宅の周囲の保護された場所から、遠く離れた林野に場所を移している(邸宅が描きこまれていないので、かなり遠いと考えられる)。言葉を換えれば、女性

21 バーネット『秘密の花園』(たとえば、山内玲子訳、岩波少年文庫124)。

と子どもが囲われた庭から解放されたといっている。ロビン・フッド²²の時代はすでに遠い過去となり、安全な場所が山野まで広がったのだろう。本誌第2号掲載の「フローラの娘たち」²³で見たように、かつては囲われた敷地内の花壇が女性たちの教養を高める場所だった。いまや邸宅を離れた山野まで行動半径を広げ、母親が娘に植物や自然についての教養を伝えているらしい。見方を変えると、同時代のS・H・ヒバード(前号掲載の拙論²⁴参照)が推奨した野外での自然観察は、都市で働く「下層中産階級(lower-middle)」の休日の活動だったが、ロビンソンの購読層は同じことを日常的に行う場を「ワイルド・ガーデン」として所有していたということもできる。

このような庭(「ワイルド・ガーデン」)を持てるのは、「風景式庭園」にするほど広大な土地の所有者である必要ではないが、一定以上の広さの土地を所有する人々に限られるだろう。ロビンソン自身は「風景式庭園」の訓練を受けてきたが、英国はすでに第二次産業革命の時代であり、植民地からの農産物輸入が急増し農村の荒廃と大地主階級の衰退がはじまっていた。つまり「風景式庭園」の時代はすでに過ぎ去っていた。その間隙に都会の喧騒を逃れて進出してきた「上層中産階級」が、ロビンソンの主要な顧客だったと考えられる。

「ワイルド・ガーデン」はロビンソンがガーデナーとしての訓練を受けた風景式庭園の伝統の流れに位置づけられるが、その規模がずっと小さい点がまらず異なっている。それ以上に、旧来の風景式庭園では排除されていた花を植え込むことが、もっとも根本的な違いだといえるだろう。花のあるなしの持つ意味は、けっして小さくはない。花を女性的なものに見なすならば、風景式庭園を小規模にしたと見える「ワイルド・ガーデン」だが、じつは女性と子

22 シャーウッドの森のロビン・フッドは、農民など庶民にとっては「義賊」だが、貴族など大地所有者にとっては秩序を破壊する盗賊集団の首領である。ロビン・フッドやチャタレー夫人と森や庭園との関係については、川崎寿彦『森のイングランド——ロビン・フッドからチャタレー夫人まで』(平凡社ライブラリー)が興味の尽きない論考を提供してくれている。

23 新妻昭夫(2005年)「資料紹介:フローラの娘たち」、『園芸文化』第2号:71~84ページ。

24 新妻昭夫(2008年)「J・S・ヒバード(園芸ジャーナリスト)の生涯・I——“都会のなかの庭園”」、『園芸文化』第5号:50~65ページ。

どもたちのための庭ということになる。また見方を逆転すれば、女性的と見なされていた花が、この時代から男性のものにもなったのかもしれない。庭や庭園に対する考え方だけでなく、花そのものに対する認識と鑑賞態度が、きわめて大きく変化したことが示唆される。

さて、そのような場所に植え込む植物として、ロビンソンはどのような種類を奨励したのか？ 彼が推奨する「外来種」の「故郷(home)」には、大陸ヨーロッパの平地だけでなく、たとえばインド亜大陸からせりあがる大山脈の山麓の山間も含まれている。ようするに「温帯」から「寒冷」な地域にかけての、英国に気候のよく似た土地である。そのような地域から導入すべき種がどれほどたくさんあるか、ロビンソンはその名を呪文のようにつらねていく……

ユリ類と、ブルーベル類〔スキラ〕と、ジギタリス類と、アイリス類と、アネモネ類と、オダマキ類と、トリカブト類と、ハンニチバナ・キスツス類(rock-roses)と、スマレ類と、フウロソウ類と、無数のマメ科の花々と、チョウノスケソウ類と、キイチゴ類と、キジムシロ類と、マツヨイグサ類と、クレマチス類と、スイカズラ類と、ミカエルマス・デージー(アスター)類と、マトカリア(ナツシロギク)類と、スキラ類と、スイセン類と、ヒルガオ類(Bindweeds)と、ワスレナグサ類と、かわいらしい青花のルリソウ類(sweet blue Omphalodes)と、サクラソウ類と、キスゲ類と、ツルボラン類と、パラディセア類(St. Bruno's Lilies)と、そして生命が土地の隅々にまで満ち溢れているだけでなく、我が国の低地の新緑と気温を享受している地域の植物相をなす、ほとんど数え切れないほどの植物……

このあとに、花の咲き乱れる光景を謳いあげる文章が1ページ半ほどつづく(カッコでくくられているので、旅行記か文学作品からの引用だろう)。そして、次のことが強調される——「心にとめておくべき大切なことは、これらの植物が耐寒性であり、我が国の気候において、在来植物と同じようによく育つだろうということだ」(原文での強調はイタリック)。

もちろん、英国にも在来の美しい花があるとロビンソンはいう。外来植物

におとらず美しい植物が、「我が国の“刈り込まれた庭(trim garden)”をかこむ林や萌芽林や灌木林のいたるところに見つかるだろう」。

元来、我が国の森林や荒地(wild)でも、春に愛らしい花が見られないわけではけっしてない。そこここにスズランや野生のスノードロップが見られるし、優雅なサクラソウやキバナノクリンザクラはどこでも見られるだろう。ときにはブルーベルやジギタリスが林の全面をほとんど占拠し、そこを春の美のパラダイスとなしている。しかし、こういった宝物にめぐまれていても、庭園のなかや近くには、我々の創造力の範囲内で見られる美しさにくらべ、魅力あるものがなにもない。

このような状態を改善するためには、外国から美しい花を導入して植え込むべきというのが、ロビンソンの主張である。英国はヴィクトリア朝の最盛期であり、地球上のあらゆる地域にある植民地を統括する「大英帝国」となっていた。いわゆる「プラント・ハンター」がもっとも活躍したのは、この前後の時代からであった²⁵。

『ワイルド・ガーデン』初版の第一部「説明」のうち、まだ五分の一しか紹介していない。それでも、先に見たロビンソンの後年の主張の大筋が初版以来のものであることが確認できたと考えていいだろう。

「ワイルド・ガーデン」の利点——6項目の箇条書き

初版の「説明」は、書き出しから最後まで「詩的」といってよく、論理的とは到底いえない。「説明」の半ば前後からは、彼が提唱するやり方をすればどれほど美しい景観が創造できるかが謳いあげらる。ただ1個所だけ、箇条書き(6項目、4ページ余り)が、間奏のように折り込まれている。

第5版の「説明」は、初版の半分ほどに縮小されている(主要な省略箇所は成果の美しさを謳いあげる描写であり、パーソンによる挿絵の採用によって

25 初版にざっと目を通しただけではあるが、後の版(第五版、1895年)に比べ日本産や中国産の植物はあまり利用されていない印象がある。おそらく日本(開国は1860年代)や中国でプラント・ハンターが活躍するのは、もう少し時代が進んでからと考えていいだろう。

不要と判断されたのだろう)。初版からほぼそのまま引き継がれているのは、前節で紹介した部分（なぜか冒頭のシェイクスピアの時代云々は省略され、「およそ1世代前……」からの部分）と、そして6項目の箇条書きであり、この部分がほぼ3ページ分つまり3の1ほどを占める²⁶。

したがって、この箇条書きをロビンソンの主張の要点と見なすことができるだろう。以下、資料価値の高い部分と考えるので、そのまま紹介しておく（ただし、下線は原文ではイタリック。また適宜、段落を入れて訳した）。

第1に、もっとも美しい耐寒性の花々は、私が薦めている場所でのほうが、これまで植えられていた旧式のボーダーでよりも、ずっとよく育つだろうから。

かなり小さな植物、たとえばツタ葉のシクラメンという美しい植物でさえ、庭では完璧なことはまず見られないが、疎林に帰化して苔むした地面いっぱい広がっているのを、私は見たことがある。

第2に、これまで庭に植えられていたときにくらべ、葉の美しい植物やシダや花、またツル植物、装飾的な草、矮性の枝の垂れた灌木が、嬉しいほどおびただしいやり方でたがいに手を差し伸べあっているおかげで、見た目がはるかによくなるから。

本書が聡明な読者にしめそうとしている千もの組み合わせのどれひとつをとっても、古いミックسد・ボーダー、あるいは通常のタイプの現代的な花の庭のどの側面よりも、はるかにすぐれていることがわかるだろう——絶景の峡谷を、運河と生垣しか目に入っていない田舎と比較するようなものかもしれない。

第3に、私が提案するように配置すれば、枯れて腐ることによる不快

26 ロビンソン『英国の花の庭 (*The English Flower Garden*)』(初版、1883年)にも「ワイルド・ガーデン」の章がある。いま手元で参照しているBloomsbury Publ.のペーパーバックスは1933年の第15版のリプリントだが、巻末付録で各版の異同を整理してくれていて、「ワイルド・ガーデン」の章は初版からあることがわかる。この章はわずか7~8ページしかないが、その中心は6項目のうち最後の項目を除いた部分で、言葉をすこし修正しただけでそのまま使われている。残りもスイセンやスノードロップを例にした具体例で、初版以来の説明とほぼ変わらないと見ていいだろう。

な印象がもたらされることがないから。

古いミックスド・ボーダーの、春の最初の開花と初夏の花盛りが終わった後の見苦しさには耐え難いものがあり、支柱にしばられた枯れ茎のたばは、そこを「束ねた武器」を背負った大勢の交差点掃除人の観兵式場のようになってしまう。ユリを、私が薦めるように、シャクナゲの群落のあいだのところどころに疎らに植えるようにすれば、それだけを孤立した目を引くまとまりとして植えたときより、その花はずっと称賛されるだろうし、花期が終わった後は植生のあいだで気づかれることなく、ボーダーなどの融通がきかず工夫のしようがない茂みのあいだにあるときのように目障りになることもない。野生や半野生の状態では、個々の種は、それぞれの花盛りにその美を主張し、その種の花期が終われば別の種が引き継ぐか、あるいは周囲の無数のもののあいだに姿を隠していく。

第4に、我が国の「刈り込まれた庭(trim gardens)」では、一度も場所を得たことがなかったし、またそこに植えられることは許容されないだろう数百種類もの植物を育てることができるだろうから。

それらは、庭に植える価値があると一般に考えられている植物ほどには目を引かず、庭ではけっして見ることのできない多数の植物のことである。そういった数多くの花々の美しさは、とりわけまとまった数を目にしたときには最高ランクに位置づけられる。そのうちのひとつが定形的なボーダーに一株だけあったならば、どんなときでもそこに植えられる価値があるとは思ってもらえないかもしれない——だが、林のなかの、どこかしら野生的な空地で他の植物と組み合わせられたなら、その見栄えはとても優雅なもとなるだろう。

私たちはふつう、ハリエニシダやキンポウゲを栽培することはないが、傑出した博物学者で旅行家のウォーレス氏は、次のように述べている——「荘厳たる熱帯植物のあいだで過ごした12年の歳月のなかで、私は我が国の景観にハリエニシダ、エニシダ、ヒース、野生のヒヤシンス、サンザシ、そしてキンポウゲがあたえている効果に匹敵する例を、一度

も見たことがない」²⁷。これらは、他の寒冷な国の多くほどには、けして豊かではない我が国の固有の植物相(indigenous flora)の人目を引く構成種のうちの、ほんの少数にすぎない！

イギリス諸島のどの地域にも数多くの邸宅(country seat)があり、そこでは百種類もの植物が、新奇だが、ウォーレス氏によって称賛されたものと同じくらい美しい、あるいはそれ以上に美しい植物が定着しているだろう。なぜなら、ヨーロッパ、アジア、そのほかの地域のより寒冷な地域には、栽培されているふつうのヒースより見目のよいヒース、英国のふつうのヒヤシンスではない多数の「野生のヒヤシンス」、ふつうに見られるよりも見目のよい多数の「キンポウゲ」、英国の5月の花であるサンザシのほかにも多数のサンザシがあり、同程度に美しいたくさんの科や種についてはいうにおよばないからだ。

庭での栽培には適さないと一般に見なされている植物のなかには、庭に植えたときほとんどなんの足しにもならないものが、それなりに含まれてはいるだろう。たとえば、アメリカン・アスター類〔ハルジオン?〕やアワダチソウ類(Golden Rods)といったたぐいの、植え込んだ場合に、より良質でより美しいボーダー・フラワーを隠してしまうだけとなってしまいがちな植物のことだ。こういった粗野な植物も、萌芽林や木立の多い場所では落ち着くべき場所をえて、しかるべき季節に花を愛でたり収穫したりされるかもしれないし、また旺盛に繁茂して禁猟区におあえつらえむきの隠れ場となるかもしれない。上の2種類に付け加えていいのかもしれない植物として、ニオイカントウ(winter Heliotrope〔*Petasites fragrans*〕)、見目のよい英国産のヤナギラン*Epilobium*〔=*Chamaenerion angustifolium*〕など、数多くの植物がある——庭にあると目を引く一方、急速に広がって庭の邪魔者となる傾向がある。こういった植物は、荒地や半ば荒れた土地に植えるべきなのは明白だろう。

第5に、このやり方によって、春の花や春の庭の問題だけでなく、耐寒性の花の全般にかかわる問題も解決できるかもしれないから。

27 アルフレッド・R・ウォーレス (拙訳)『マレー諸島』(ちくま学芸文庫)の第16章「セレベス」の一節(上巻、371ページ)。

私がいじめすやり方をすれば、田舎のあらゆる庭の多くの部分、郊外の多くの庭のさまざまな部分が、春の花で生き生きとしたものとなるだろう。アペニン・アネモネの青い星型の花は、樹木の下、日陰や半日陰の裸地のほうが、想像しうるどんな定型的な配置よりも、ずっと「野生的」に見えるだろうし、この植物は、私が提案する方法で完全な成功をとげるだろう数百種類の可愛らしい春の花のひとつに過ぎない。

第6に、私たちが温室やガラス室の植物よりはるかに興味を寄せている各地の在来種〔英国から見れば外来種〕を帰化させること以上に気持ちのよい自然との交感(communion)は、ほかにほとんどありえないから。

コロセウムの壁、新世界の大草原(プレーリー)、ヨーロッパのすべての大山脈の森と草原から、またギリシャやイタリアやスペインから、小アジアの陽光輝く丘陵地から、大きな大陸の北極地方から——簡単にいえば、旅行者が興味をもつほとんどあらゆる地方から——種子や植物を持ち帰り、自宅のまわりで彼が訪れたさまざまな景色の、このゆえなく楽しい土産を植えて定着させるだろう。

この6項目の箇条書きが第五版でどう修正されたか、簡単に触れておくのも無駄ではないだろう。初版の文章では読み取れないロビンソンの主旨が見えてくるところもある。

第1項は、冒頭に「数百もの」という単語が挿入されただけで、文章は変わっていない。第2項も、最後の「月とスッポン」式のたとえ話が省略され、言葉遣いが若干整理されただけで、基本的に変わっていない。第3項も「掃除人」のたとえなど、言葉が整理されているだけで変わっていない。

第4項は、第3段落と第4段落がまるまる省略され、第5段落は、文意は変わっていないが、「アワダチソウ類」以外の例がすべて差し替えられている。とくに「庭の邪魔者となる傾向がある」植物の例として、日本産のイタドリ(the Great Japanese Knotworts(*Polygonum*))があげられ、「花の庭の外に植えたほうが、まちがいなくよい」とされていることは特筆しておくべきだろう。イタドリは今日、国際自然保護連合(IUCN)が指定した侵略的外来植物の「ワース

ト100」にあげられ、英国で大きな問題となっている²⁸からである。イタドリは「庭の邪魔者となる傾向」のある厄介者との認識が、当時からあったことをロビンソンの文章から知ることができる。

第5項は、初版の文章では意味がいまひとつつかみづらかったが、第5版では全体的に微妙に書き換えられている。第5版のこの部分を訳出しておく……「この方法で、春の庭の問題が解決されるだろうから。あらゆるカントリー・ガーデンと、多くの郊外の庭の数多くの部分が、少なくとも住居近くの花壇を邪魔することなく、春の花で生き生きとしたものとなるだろう。アペニン・アネモネの青い星型の花は、この植物が自力で生育していたほうが、想像しうるどんな定型的な配置よりも、楽しむことができるだろう。これは我が国の野原、芝地、林で完璧に成功するだろう数百種類の可愛らしい春の花のひとつに過ぎない。またこれによって、花壇を年に二度も掘り返し、掘ったばかりの墓場のようにしておくという慣行をなくすことになるだろう」。

この第5項の主旨は、旧来の花壇での扱いでは春の花がまったく生かしていなかったという批判のようだ。同じ春の花を花壇ではなく野原や林に植え込んで帰化させれば、本来の美しさが発揮されるだろうということである。

第6項は、地名が付け加えられたり一部が変えられたりしているほか、末尾に文章が補足されている……「持ち帰った植物がその時代の庭の専制君主としてふさわしいようには思われないにしても、林や垣根に収まるべき場所が簡単に見つかることだろう。私が好きなのは、野生種のクレマチスをはじめ、異国産のツル植物や草花を、新たに造成した垣根の土手に植え込むことである」。

付録の「英国の野草の庭」とはどんな庭か

この本の主要な部分である第Ⅰ～第Ⅲ部の主題は「ワイルド・ガーデン」の原理と具体的な方法であり、扱われている植物は「帰化」させるべき「外来種」であった。それでは第Ⅳ部「英国産の野草の庭」の章で扱われている在来種

28 このイタドリの問題が、この助成研究とくに別稿(注1参照)の主要な動機となった。

の「野草(wild flowers)」とは、具体的にどういった植物なのか？ 簡単に紹介して、本稿の締めくくりとする。

この章の冒頭でロビンソンは、野原や垣根で見られる美しい在来種の花は知られているが、アイルランドや山岳域の高地など遠隔地の野草はほとんど知られていないことを指摘し、それらの植物の利用を提案する²⁹。これがこの章の目的なのである。

口の悪いロビンソンらしく、植物学者たちが「平たくして乾燥させ、埃と暗闇のなかにしまい込」んだ草花を「救出すべく努力することを提案」するのだという。批判をこめた皮肉の筆致には、思わずうなずかされる。

それはさておき、草花の救出のためには英国産の野草の完璧なリストが必要であり、植物学者が研究してきた成果を利用しない手はない。ロビンソンが推奨する英国産野草のカタログは「*London Catalogue of British Plants*」。発行元はPamplinだったが、1870年にはロンドンのソホー地区のDulauから発行されていたという。このカタログの利点は、Hewett Watson氏³⁰が考案した英国を多数の地区に区分けした植物地区を採用し、各植物名の後に生育している地区の数が数字で示されているので、普通種か希少種かをその数字で評価できることだという。

以下、ロビンソンが推奨する英国産の野草が次々に紹介されている。しかし、英国に「自生」するからとって、「在来種」とは限らない。遠い昔に海外から持ち込まれて定着した植物³¹の場合もあるし、また「外来種」の場合もある。まずは後者の場合について、すこし説明をくわえておこう。

「外来種」は、海外や外国から導入され帰化した動植物には限らない³²。植

29 このことだけを考えると、日本の「山野草趣味」と似たところがありそうだ。しかし、鉢植えか地植えかの違いは大きいだろう。英国の鉢植えの歴史については、次のような新刊が出た。Horwood, Catherine, 2007. *Potted History: The History of Plants in the Home*. Frances Lincoln Limited

30 Hewett Cottrell Watson (1804-81)。英国の植物学者で、骨相学にも関心を持ち続けた。ダーウィンと植物について手紙をやり取りし、進化論にも関心を寄せていた。彼は英国を区分けするのに、112の行政区画(county)の境界線をそのまま採用している。この境界線は今日までそのまま変化していないので、当時と現在の植物の分布を比較できるとして、近年になってふたたび注目されている。

物の地理的な自然分布には、人間が人為的に引いた国境など関係がないからである。そこで「外来種」は、大きく「国外外来種」と「国内外来種」とに二分されている³³。この分類に照らしていえば、『ワイルド・ガーデン』の第Ⅰ～第Ⅲ部では「国外外来種」の利用が奨励され、この第Ⅳ部では「国内外来種」が奨励されているということが出来る。

また「国内外来種」には2種類の、意味がかなり異なる場合が含まれている。ひとつは、栽培していた山野草などが逸出して本来の分布域以外の地域で定着した場合である。もうひとつは、亜種や地方変種など遺伝的な独自性をもつ地方個体群が逸出し、その地域のもともとの個体群と遺伝的に交雑してしまうような場合である。前者の例では分布域が変化するだけだが、後者の場合には交雑によって遺伝的な変化が起こってしまう。

次に、遠い昔に導入された植物³⁴について。ロビンソンが推奨する英国産野草のひとつに、たとえば「ツタ葉のシクラメン (*Cyclamen hederifolium*)」がある。「南ヨーロッパの在来種 (native) であり、真に英国産とは見なされていないが、いくつかの場所で見つかったし、いかにも野生的なので、そのような植物は一般的に英国産植物に含められている」という。この言葉から、

31 英国でふつうに見られ、英名で「English elm」と呼ばれるオウシュウニレ (*Ulmus procera*) のDNAを解析した最近の研究は、このニレが2000年前にローマ人によってイベリア半島経由で英国に持ち込まれた、単一のクローンに由来することを明らかにしている (Gil L. et al., 2004. Phylogeography: English elm is a 2,000-year-old Roman clone. *Nature* 431, 1053 (28 Oct. 2004))。DNA分析の手法が発達したので、今後はこの種の研究が次々に出てくる可能性が高いだろう。

32 別稿(注1)の「外来種」についての部分を参照されたい。

33 日本生態学会編「外来種ハンドブック」(注3)を参照。また別稿(注1)での外来種についての説明の部分も参照されたい。

34 「遠い昔に導入された植物」として、上の注31で見たような例のほかに、いわゆる「コテージ・プラント」という一群の植物がある。その種数や種名については研究者によって意見が異なるようだが、タチアオイやヒマワリ、チューリップ、マリゴールドなどは定番とっていいだろう (Anne Scott-James, 1981. *The Cottage Garden*. のAppendix: Some Evidence on Cottage Plantsを参照した)。タチアオイは中国原産であり、ヒマワリは北米、チューリップは地中海から小アジア半島、マリゴールドは中米が原産である。ついでに指摘しておけば、マリゴールドは南アジアや東南アジアのヒンズー教と仏教の供花のなかでもっとも一般的な花であり、新大陸が発見されてごく早い時期に、急速に伝播して世界各地に広がったと考えられる。

ロビンソンだけでなく当時是一般的に、「在来種」と「外来種」の区別に曖昧なところがあり、また「外来種」の「帰化・野生化」がとくに問題視されていなかったらしいことがわかる。同じように「在来種」と「外来種」の曖昧な境界線上に置かれている植物の例を、いくつか見てみよう。

春にロンドンの街角のあちこちで大量に売られている美しい「クチベニズイセン」(*Narcissus poeticus*)は、真に英国産とは見なされていないとはいえ、一般的には在来植物に含められている。どちらであれ、これほど美しさが際立った植物はあらゆる庭園に植えられるべきだ。スノーフレック (*Leucojum aestivum*) は南東部のいくつかの州 (county) で見られ、ボーダーの見目のよい球根植物となる。矮性で可愛らしく美しい春咲きのスノーフレックが、近年になってドーセット州でかなりの数が見つかった。一方、マツユキソウ(スノードロップ)は国中のさまざまな場所で完全に帰化している。いうまでもなく、これらはすべて英国産の野草のどの生きたコレクションにも入れるべきであり、あわせてスイセンと森林チューリップ(Wood-tulip: *Tulipa sylvestris*)も加えるべきだろう。

この引用中の植物はすべて大陸ヨーロッパ南部から持ち込まれたものだが(ただし「森林チューリップ」と訳した種は同定できなかった)、当時すでに英国で帰化・野生化しており、ロビンソンはあえて「英国産の野草」すなわち英国の「在来種」として扱うことを主張している。ロビンソンがこの本で提唱した「ワイルド・ガーデン」という庭造りの手法が、さらに多数の外来種の帰化・野生化を促進しただろうことは容易に想像できるだろう。

最後に、ロビンソンの「ワイルド・ガーデン」がどのような景観を作り上げたかを、第5版の挿絵で見てみよう。スイセンが描き込まれた挿絵を選んでみた。スイセンを野原に植え込んで帰化させる手法は、彼が提案した具体例のなかでもっとも成功したらしく、彼の主著『英国の花の庭 (*The English Flower Garden*)』(1883年)³⁵でも例にあげられ、また第二版から登場したアルフレッド・パーソンの多数の挿絵のなかで、今日もっともよく紹介されて

いるようだ。

趣きはまったく異なるが、日本の海岸沿いの早春の風物詩となっているニホンズイセン（フサザキスイセン：*Narcissus tazetta* var. *chinensis*）の原産地は地中海沿岸であり、「古く中国、日本にまで渡来し、自生化している」³⁶。いわゆる「史前帰化植物」³⁷である。秋のお彼岸のころに田んぼの畦などを赤く染めるヒガンバナ（*Lycoris radiata*）も、古くに中国から持ち込まれた史前帰化植物だとされている。

ニホンズイセンやヒガンバナの例を考えていくと、日本人は有史以前から無意識のうちに「ワイルド・ガーデン」を実践していたのではと想像してみたくなる。おそらく日本に限らず、欧米でも他の大陸でも同じではないのか？

ロビンソンの「ワイルド・ガーデン」とはなにかを整理することによって、私たちにとって庭とはなにか、景観や環境とはなにかについて考えるときの、新たな糸口をつかむことができたように思う。

35 注26を参照。

36 塚本洋太郎（総監修）『園芸植物大事典』全3巻（1994年、小学館）

37 「史前帰化植物（prehistoric-naturalized species）」という概念を最初に提唱したのは植物学者の前川文夫であり、1943年に『植物分類地理』（13:274-79）に掲載された同題の論文で発表された。



左:第5版の扉絵:「西部の浅い谷筋に咲くサクラソウ、リュウキンカ、ラッパズイセン。」

右:「野原の一面に花盛りのクチベニズイセンが広がる。最近の品種、植え込んで6年。土壌は冷たいローム。牧草は毎年刈り取られる。このスイセンはけっして衰退せず、年毎に質がよくなり、大きさと草丈は降雨量によって大きな変化を見せる。土壌に手はまったく加えていず、ただ草地を掘り上げ、球根を埋め、そして草を戻しただけである。」